

日本のヲコト点の起源と古代韓国語の点吐との関係

小林 芳規

〔要旨〕

日本のヲコト点の起源については、今まで一元論に立って、九世紀初（平安時代初期）に南都（奈良）僧によつて、片仮名と共に、創案されたと説かれて来た。しかし、韓国において角筆による点吐が発見されてその解説が進み、併せて日本所在の新羅經典の点吐資料の再発見も加わつたことにより、日本の使用初期のヲコト点が、古代韓国語の点吐と類似性を示していることが分つた。そこで、既発表に新しい材料を加えて、その影響関係を考えると共に、それに基づいて、日本のヲコト点が展開する過程を探つてみる。

一、日本のヲコト点研究の概要

——以下の考察の前提として——

1. 大矢透博士による訓点資料の発見とヲコト点への着目
周知のように、大矢透博士は、二十世紀初に訓点資料第一号となる「法華文句卷第一」に、仮名の歴史研究資料としての価値を見出し、その後の調査で蒐集した五十点の訓点資料を整理して、

一九一〇年に『仮名遣及仮名字体沿革史料』を出版して、日本の訓点資料研究の緒を開いた。

訓点資料は主として仮名とヲコト点とが相俟つて漢文の訓読がなされるが、此の著書では、仮名に注目してヲコト点を考慮しなかつたので誤読も生じた。

このことに気づいた大矢博士は、その後、『地藏十輪經元慶点』（大正九年・一九二〇刊）、『成実論天長点』（大正十一年・一九二二刊）、『願經四分律古点』（大正十一年・一九二二刊）を出版して、それぞれのヲコト点の幾つかを帰納して示すようになった。

2. 吉沢義則博士による特定資料のヲコト点研究

次いで、一つの訓点資料に使われたヲコト点を帰納して論ずることが、吉沢義則博士により行われるようになった。吉沢博士が取り上げたのは、平安時代の博士家を取り扱つた漢籍と、仏書では真言宗のヲコト点と、平安初期の表啓の一資料であり、特定の訓点資料に限られていた。それらは論文集の『国語国文の研究』（昭和二年・一九二七刊）、『国語説鈴』（昭和六年・一九三二刊）に収載されている。

3. 中田祝夫博士によるヲコト点の総合的研究

中田祝夫博士は、『古点本の国語学的研究 総論篇』（昭和二十九年・一九五四刊）において、全国に博搜した訓点資料に基づき、そのヲコト点を分類した。単点（星点）を基に、第一群点から第八群点の八群とし、起源の一元説に立ってそれらの相互の関係を説いて、ヲコト点の体系論を述べ、各群の時代的前後をも明らかにすると共に、更に各ヲコト点の使用者と宗派・学統との関連を説いた。分類の手掛りとなったのは、鎌倉時代に二種以上のヲコト点を集合した「点図集」である。

4. 築島裕博士によるヲコト点研究の継承と推進

築島裕博士は、これを承けて、「点図集」所載の二十六種のうち、名称のみあつて使用例の無いとされた十三種、実態があつて名称の無い三種について、殆どを諸寺の調査により確認し、素姓を探つて命名すると共に、ヲコト点と宗派・学統との関係について、中田説を補強し、時代を溯らせたり確かなものにしたりした上で、それらを仏教教学との関連で把え、訓点資料の日本語史上への位置づけを行った。その成果は、『平安時代訓点本論考 仮名字体表』（昭和六十一年・一九八六刊）と『平安時代訓点本論考 研究篇』（平成八年・一九九六刊）に纏められた。

二、日本のヲコト点の起源についての説

1. 日本創案説

中田祝夫博士は、日本のヲコト点の出自について「朝鮮」に言及したが、これを否定して、日本創案説を採っている。即ち、ヲコト点は略体仮名と同じ目的で同じ時代（平安初期ごろ）九世

紀初）に生まれたものであり、平安初期の略体仮名が吏道に似ていないのでヲコト点も「朝鮮出自」ではないとした。

この説は、角筆口訣や墨書口訣の発見される前の、恐らく十四世紀以降の省画化された字形の多い吏道に拠つたものと考えられる。近時発見された新羅經典の角筆による真仮名本位の仮名は、日本の九世紀初の訓点資料の仮名に類似性が認められるので、再考の余地が生じている。

中田祝夫博士が日本創案説を採つたのは、春日政治博士の所説に負う所が大きいと見られる。

2. 日本の「発生初期のヲコト点」

春日政治博士は、日本の訓点が平安時代初期（九世紀初）に南都古宗の僧により創案されたという考えの基に、ヲコト点の最も古い二資料を取り上げて、「発生初期のヲコト点」と指摘している。

その二資料とは、正倉院聖語蔵に伝来した神護景雲（七六七—七七〇）書写の羅摩伽経と華嚴経（旧訳）であり、そのヲコト点を次のように帰納して示された。（仮に①と②とする）



いずれも、単点（星点）を七箇または八箇用いただけの素樸なものであり、主として助詞の中でも主要な助詞を表すのに用いている。この形式の点法は、後世の「点図集」に所載のヲコト点の

どの点法にも合わず、又、中田祝夫博士が分類された第一群点から第八群点までのいずれにも合わないので「特殊点」とされたものに当る。特殊点は、近年、築島裕博士が甲類と乙類との二種に分けられた。それによると、①の羅摩伽経は特殊点甲類、②の華嚴経（旧訳）は特殊点乙類に属する。

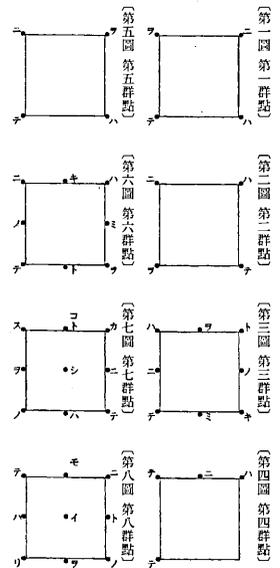
「発生初期」には種々のヲコト点法があったことも考えなければならぬが、現存する資料で見ると、日本のヲコト点の使用初期においては、単点（星点）だけを七箇または八箇用いた素様な形式の点法であり、しかも特殊点の甲類と乙類との相異なる二種が存したことが知られる。これは単なる偶然ではないように思われる。

羅摩伽経は、善財童子求道譚を記したもので、大方広仏華嚴経の入法界品の抄訳である。旧訳華嚴経と共に、この①②の二種が華嚴経を読解するために施されたヲコト点であり、それが華嚴経を所依とする東大寺の正倉院に伝来しているのが注目される。それに加えて、③④の二経典は共に神護景雲一切経であり、その勘経と見られ、白点使用の初期のものでありその白点でヲコト点が施されている。そこに意味がありそうである。

三、ヲコト点の八分類と特殊点

1. ヲコト点の八分類の基本となる星点の概念図

中田祝夫博士が、現存する訓点資料に基づいて、ヲコト点の種類を八群に分類する手掛りとしたのは、単点（星点）の異なりである。それを築島裕博士は概念図として次の第一図から第八図に纏めている。



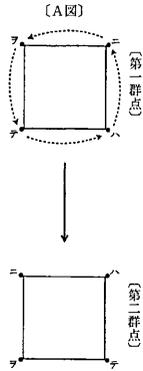
第一図の「第一群点」は、四隅の左下の点を「テ」、左上「ヲ」、右上「ニ」、右下「ハ」とする共通点を持つヲコト点の資料群を総称したものである。第二図の「第二群点」は、四隅の左下の点が「ヲ」、左上「ニ」、右上「ハ」、右下「テ」を共通点とするヲコト点の資料群を総称し、以下、第八図の「第八群点」までのように、分類している。

2. 一元論に立つヲコト点の種類の生成

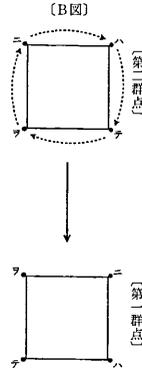
ヲコト点は、漢字の四隅・四辺等とそこに施した点が担う助詞（又は音節）等によつて成立する。若し四隅・四辺の位置とそこに施した点が担う助詞等が固定していれば、ヲコト点の種類は一種類に止まる。しかし、ヲコト点の種類に異なりがあるということは、一元論に立てば、点の担う助詞等が固定したものでなく、入れ換えが行われたことを意味する。

中田祝夫博士は、九世紀（平安初期）に第一群点から第二群点 が成立し、以下、第三群点、第四群点の順に成立し、十世紀（平安中期）以後、第五群点・第六群点・第七群点・第八群点の順に出現したと推論された。

第一群点と第二群点との関係について見れば、中田博士は、



A図の上図の第一群点を点線のように左方に90度廻転させて第二群点が生じたとされた。これに対して、築島博士は、右方に廻転するケースが多くて自然であるとする所から、

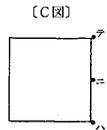


B図の上図の点線のように、第二群点を右方に90度廻転して第一群点が生じたとされた。

いずれも、一元論に立つて説かれたものである。

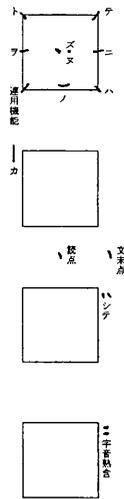
3. 特殊点とその分類

中田祝夫博士は、八つの群に属さないラコト点を「特殊点」と命名し、これが最も早い時期に現れ、平安初期の第一群点が出現する以前のラコト点の萌芽的なものと把握された。築島裕博士は、その「特殊点」の中に、左のC図のように、右辺の上隅・中央・下隅に星点「テ」「ニ」「ハ」が並ぶという共通性を持った一類が存在することに注目し、この類を「特殊点乙類」と命名され、それ以外を一括して「特殊点甲類」とされた。

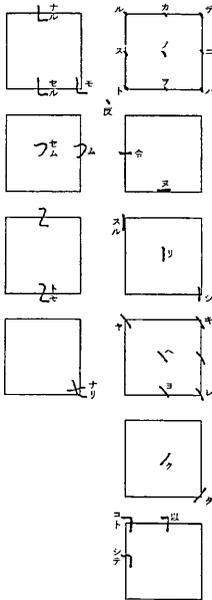


4. 特殊点乙類を用いた平安初期以前の訓点資料

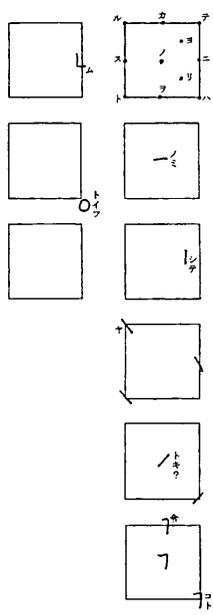
① 神護景雲写旧訳華嚴経（慶応義塾図書館蔵巻第十四・京都国立博物館蔵巻第十七）



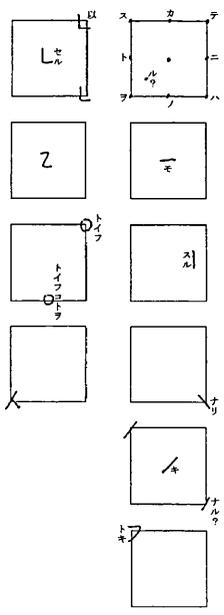
② 石山寺蔵大方広仏華嚴経巻第二十一〜巻第四十二（但し巻第十三、三十四を除く）、巻第六十四〜巻第八十（但し巻第七十九を除く） 三十八帖（石山寺一切経）



③ 石山寺蔵四分律卷第三十一〜卷第四十（巻第三十七を除く）九帖（石山寺一切経）



④ 京都国立博物館蔵十二門論 一卷



平安初期の特殊点乙類として、右辺の上隅・中央・下隅に「レ」「ニ」「ハ」を持つ資料には、他に、⑤東京大学国語研究室蔵因明論疏一卷が存する。この因明論疏は単点(星点)が②の大方広仏華嚴経と一致している。③の四分律も単点(星点)が一致するが、更に壺の内部に「ヨ」「リ」を持っていて一歩進んだ状態を示している。

平安初期以前の特殊点乙類のワコト点帰納図を比べてみると、次の事柄が分る。

(i) 単点(星点)が、「テ・ニ・ハ」の位置を同じくするだけでなく、「ヲ・ト・ノ」も共通して存し、この三点は位置にず

れを持つものもあるが相互に近い位置に配置されている。(ii) 単点(星点)の他に、線や鉤の符号も用いられているが、①神護景雲写旧訳華嚴経は、線の符号は「カ」を表した一箇だけであり、他には複点が二箇だけであつて、全体として素樸な点法である。

(iii) ワコト点を施した時代を考えると、①神護景雲写旧訳華嚴経は、神護景雲一切経として書写され、訓点はその勘経として施された¹²⁾と見られるから、書写の時期に近い、奈良時代(八世紀)後半期と考えられる。これに対して、②石山寺蔵大方広仏華嚴経、③石山寺蔵四分律、④京都国立博物館蔵十二門論、以下⑤因明論疏は、平安初期(九世紀)に、各宗が所拠とした経典を講読するために全巻にわたつて加点了したものである。

(iv) ①神護景雲写旧訳華嚴経が、加點の時代とワコト点の素樸な内容とから見て、特殊点乙類の中で最も古いものであり、②⑤は平安初期になつて、①の旧訳華嚴経のワコト点を基に、発達したものと考えられる。

四、神護景雲写旧訳華嚴経の特殊点乙類のワコト点と韓国の華嚴経の角筆点吐との関係

1. 春日政治博士の調査された旧訳華嚴経と①慶応義塾図書館蔵・京都国立博物館蔵の旧訳華嚴経との関係

春日政治博士が「発初期のワコト点」が用いられているとされた正倉院聖語蔵の旧訳華嚴経(四類一〇号)は、六十巻のうち五十一巻が現存し、春日博士はそのうちの六巻(巻二・五・七八・九・十)を調査されたものである。¹³⁾

この旧訳華嚴經の卷第十四と卷第十七は聖語藏には欠けていて、流出した卷第十四が慶応義塾図書館に現蔵され、卷第十七が京都国立博物館に現蔵されている。訓点の内容から見ても共に聖語藏藏本の僚卷であることが分る。

この卷第十四と卷第十七のヲコト点を帰納したのが、特殊点乙類として先掲①に示したものである。春日政治博士が「發生初期のヲコト点」として示された図（先掲①）と比べると、次の小異がある。

(i) 春日博士は星点八箇だけとされたが、星点の他に、線の符号「カ」と複点二箇も用いている。

(ii) 星点のうち、左下隅を春日博士は形容詞の語尾「ク」とされたが、「普」の副詞語尾だけでなく、「為」や「從」の「自」で導かれる副詞句、動詞（又は助動詞）に付いてそれを含む句を連用句として下の句に続ける等、「連用機能」を表している。

爲衆生善令成就 无上智（卷第十七130行）

自遠而來欲有所請（卷第十四174行）

(iii) 星点の壺の中央を春日博士は「カ」とされたが、否定の「ズ」「ヌ」等を表している。

觀察過去諸法十方推求 都本可自得（卷第十七187行）

菩薩如是學廻向心不稱量諸二法（卷第十七146～147行）

2. 韓国の華嚴經の角筆点吐との関係

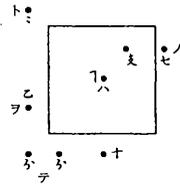
奈良時代（八世紀）の神護景雲一切經の勘經と見られる①旧訳華嚴經の卷第十四と卷第十七のヲコト点図を、同じ特殊点乙類を

用いた平安初期加點の②③④のヲコト点図と比べると、大きな相違が二点認められる。第一点は、①旧訳華嚴經では複点を用いているのに対して、平安初期加點の②③④では複点を用いていない。第二点は、①旧訳華嚴經の単点の左下隅を「連用機能」を表すのに用いているのに対して、②③④では「連用機能」を表す点は無くなっている。この相違は、平安初期の特殊点乙類を用いた資料だけでなく、平安初期の他の訓点資料と比較しても同様に認められる。特に「連用機能」のような文法機能を表すヲコト点は、平安中期（十世紀）以降を通じて、日本のヲコト点では用いていない。そこで考えられるのは、韓国の角筆点吐において単点と共に複点が重要な符号として用いられていることである。そのうち、十一世紀の初雕高麗版の華嚴經（周本）に角筆で施された点吐の単点の図は次のようである。

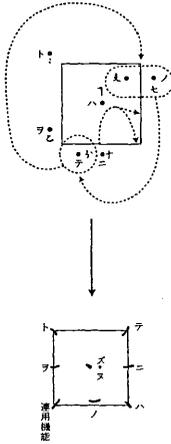
?	フ	ハ	カ	ク
セ	シ	シ	シ	シ
ウ/ク	フ	フ	フ	フ
ニ	ハ	ハ	ハ	ハ
一	ナ	ナ	ナ	ナ

周本「華嚴經」卷第五十七の單點圖
〔角筆口訣の解讀と翻譯2〕所収
李丞宰「符點口訣の記入位置에
대하여」による

これを同じ誠庵古書博物館蔵の六十卷本大方広華嚴經卷第二十（晋本）と比べると、複点以下は相違があり、単点でも壺内の点にも一致しないものがあるが、単点で一致するものについて、それらに日本語を宛ててみると、次の図に示した点が①旧訳華嚴經の単点と相通する。



但し、位置に差異があり、①旧訳華嚴経が漢字の四隅・四辺を使っているのに対して、角筆点吐は漢字の周辺と壺内を使っている。この差異を考慮しなければ、「乙・ヲ」と「ミ・ト」とは同じ位置に加点されている。他の「カ・テ」「十・ニ」「一・ハ」「セ・ノ」「エ」は位置が異なるが、次掲の上段図の点線のよう移動させると、下段図の①旧訳華嚴経のラクト点図になる。



古代韓国語の点吐(ラクト点)を奈良時代の日本で借用し取り入れたとした場合、そのままの形式ではなく、一部を移動させて取り入れたと考えられる。

その場合、二つの原則が考えられる。

一、古代韓国語の助詞類を日本語の助詞類に訳して取り入れるに際し、日本語で使用頻度の高い助詞、例えば「テ」と「ヲ」などは、符号の位置を遠く放す。近い位置にあると紛れ易いからである。「一」「二」などの平たい字形の漢字の場合を考えると分り易い。

二、移動の方向は、右廻りの時計の針の動きの方向で入れ替る。この原則によって、韓国の大方広仏華嚴経角筆点吐の星点の移動を見ると、「カ・テ」を「乙・ヲ」から放して右上隅に移す。そのために、右上隅のやや下寄りの「セ・ノ」と内側の「エ」とを、元の「カ・テ」の位置とその右に移すことになる。新しく移ってきた「ノ」と放すために「十・ニ」を「一・ハ」と共に右廻りの原則に従って右辺の中と右下隅に移す。こうして神護景雲写華嚴経(旧訳)のラクト点図が生まれる。

こう考えて来て問題となるのは、韓国の角筆点吐の方が時代が下ることである。六十卷本大方広仏華嚴経第二十(晋本)は十世紀刊、初雕高麗版大方広仏華嚴経は十一世紀後半刊であるからその角筆点吐は、神護景雲写華嚴経のラクト点より時代が下つたものとなる。しかし、韓国の両大方広仏華嚴経で共通する単点は新羅時代に溯って使われた可能性がある。

その裏付けとなるのが、神護景雲写華嚴経の京都国立博物館蔵巻第十七に角筆で施された点吐らしい書き入れである。例数が少なく疑問もあるが、次のようである(平仮名は白書のラクト点、片仮名も白書)。



菩薩は如は是は學は二は廻は向は一は (146行)



究は竟は得はレは至は三は非は趣は彼は岸は一は (78行)

用例数が少ないので単なる傷の恐れもあるが、単点の「ㄱ・ハ」が一致しているのは偶然とは思われない。「ㄱ・ハ」は漢字の中央に施されていて韓国の角筆点吐の位置と一致する。同じ漢字に白点で施された「ハ」は右下隅の位置であり、既に日本で借用して入れ換えたヲコト点になっている。本文184行の「供具」の左傍にも角筆の単点らしい凹みがある。傷でないとする、「乙・ヲ」に当るが、文脈上疑いがある。複点と見られる角筆の凹みは解説できていない。

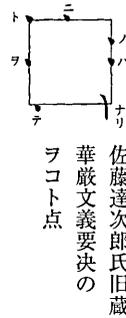
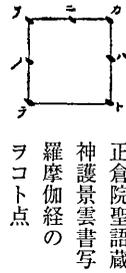
この旧訳華嚴經卷第十七には、角筆による梵唄譜と合符も施されていて、それが新羅の符号であるから、角筆の点吐も一緒に移写された可能性がある。この京都国立博物館蔵卷第十七には、新羅の仮名(字吐)の「ㄱ」(亦)の省画体¹⁵が認められることを李丞宰教授が指摘している。このような、新羅の、字吐や角筆点吐は、勘経の証本とした新羅經に書き入れられていたものが、そのまま転記されたものであろうと考えられる。

五、神護景雲写羅摩伽經の特殊点甲類のヲコト点と「華嚴文義要決」の点吐との関係

春日政治博士が「発生初期のヲコト点」とされた、もう一つの神護景雲写羅摩伽經のヲコト点が特殊点甲類であることは先掲の通りである。これと類似のヲコト点を持つものに、佐藤達次郎氏

旧蔵の華嚴文義要決が挙げられる。

比較の便のために、春日博士が示された羅摩伽經のヲコト点(先掲^a)を上段に、華嚴文義要決のヲコト点を下段に掲げる。¹⁷



この二つの点図を比べると、「テ」「ニ」「ハ」の位置が同じである。このことにより、ジョン・ホイットマン教授は、「或る程度の類似性を示す」ことを指摘した。これに、先述の古代韓国語のヲコト点(点吐)を借用する時に採られた移動の二原則を適用させると、華嚴文義要決では「テ」と「ヲ」が接近しているので、この使用頻度の高い二つの助詞のうち「ヲ」の方を、「テ」より放して左上隅に移動させる。そこにあった「ト」は遠く右下隅に移す。併せて、「ハ」の近くにあった「ノ」を左辺中に移し、空きの生じた右上隅に新たに「カ」を入れると、羅摩伽經のヲコト点となる。

こう見ると、華嚴文義要決のヲコト点に反映された新羅の点吐¹⁸から羅摩伽經のヲコト点が生じた可能性が大きいことになる。

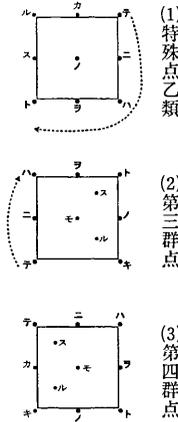
六、特殊点甲類・乙類から第一・二・三・四群点の成立過程

1. 特殊点乙類から第三群点・第四群点の成立
特殊点乙類が第三群点と次いで現れる第四群点との前駆となる

ものであることは築島裕博士が指摘している。⁽²⁰⁾

このことを石山寺藏華嚴經（一切経第十九函・第二十函）の平安初期点で具体的に見ることにする。石山寺藏華嚴經（新訳）は八十巻のうち、補写を除くと、平安初期の白点が五十八帖に存する。五十八帖の白点をラコト点の種類別に見ると、

- (1) 特殊点乙類……巻第二十一〜四十二、巻第六十四〜八十（中に補写あり） 三十七帖（先掲）
 - (2) 第三群点 ……巻第四十四・四十五・四十七〜五十 六帖
 - (3) 第四群点 ……巻第四十三・四十六 二帖
 - (4) 特殊点甲類……巻第五十一〜六十三 十三帖
- となる。このうち(1)(2)(3)のラコト点の単点（星点）はいずれも「テ・ニ・ハ・ヲ・ト・ノ」を持っていて、その位置は次のようである。



(1) 特殊点乙類の「テ・ニ・ハ・ヲ・ト」を180度右方向に廻転させると、(2) 第三群点となり、この(2) 第三群点を更に90度右方向に廻転させると(3) 第四群点となる。中田祝夫博士は第三群点が東大寺辺に生じたと推定されている。⁽²¹⁾ 華嚴經の注釈に用いた華嚴經探玄記の聖語藏卷第十九平安初期白点も、(2) 第三群点と同じ単点である。

第四群点が第三群点を90度右廻りに廻転させて作られたことは中田博士が説かれ、築島博士は十世紀頃までは多分南都で行われ

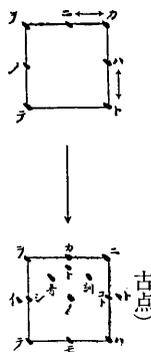
たとされる。聖語藏の華嚴經探玄記卷第九平安初期点は第四群点である。

2. 特殊点甲類（羅摩伽經）と第一群点・第二群点との関係

特殊点甲類は種々の点法があり、平安初期点には第四群点の成立に係ると考えられるものもあるが、最も古く「発生初期」とされる羅摩伽經の単点七箇による点法は、第一群点及び第二群点の単点と親近性を持っている。

- (1) 第一群点との親近性
羅摩伽經（特殊点甲類）の 第一群点の単点
ラコト点

（成実論天長五年点
金光明最勝王経註釈（飯室切）



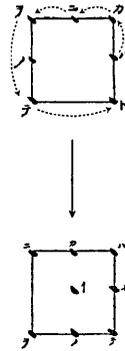
「テ」と「ヲ」の位置は同じであり、「ニ」と「カ」、「ハ」と「ト」をそれぞれ入れ換えると第一群点に近くなる。このような部分的な入れ換えで別種のラコト点を作ること、日本のラコト点の展開では見られる方法である。羅摩伽經のラコト点が第一群点の古形であることは中田博士が指摘している。⁽²²⁾ 第一群点の祖点が東大寺など南都で行われたことも指摘されている。⁽²³⁾

(2) 第二群点との関連

羅摩伽經(特殊点甲類)の
ヲコト点

第二群点

(聖語藏阿毗達磨雜集論卷第十)



一古点

羅摩伽經の「ヲ」「ノ」「テ」を左に90度廻転し、「ハ」「カ」「キ」をそれぞれ左に廻すと右掲下図の第二群点となる。この阿毗達磨雜集論卷第十一のヲコト点は第二群点の最古と見られ、現に東大寺の正倉院に伝存している。左方に廻転させて別種のヲコト点を作ることとは、日本のヲコト点の展開の中では、「法華義疏長保四年点」のように行われている。

3. 新羅の点吐との関係

春日政治博士が「発生初期のヲコト点」と指摘された④羅摩伽經と⑥旧訳華嚴經とが新羅の点吐の影響であるとすれば、特殊点甲類・乙類が第一群点・第二群点と第三群点・第四群点の前駆的な位置にあることから考えて、日本のヲコト点の起源は新羅の点吐と深く係っている可能性が大きい。

但し、以上は現存資料に基づく推論であって、他の考え方もありうるであろう。

注

(1) 吉沢義則『国語国文の研究』(昭和二年・一九二七刊)

所収のヲコト点の論文

大唐三藏玄奘法師表啓の訓点

真言宗の乎古止点(浄光房点)

尚書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止点に就きて

同『国語説鈴』(昭和六年・一九三一刊) 所収のヲコト点の論文

井々竹添先生遺愛唐鈔漢書楊雄伝訓点

王朝時代に於ける博士家使用ヲコト点

(2) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」(昭和二十九年・一九五四刊) 一八三頁「ヲコト点における種々の問題」。

(3) 拙稿「角筆による新羅語加点的華嚴經」(『南都仏教』第九十一号、平成二十年十二月)。

(4) 拙稿「文字の交流―片仮名の起源―」(『文字とことば―古代東アジアの文化交流―』二〇〇五年五月)。

日本創案説は、既に春日政治博士が説く所であり、「初期点法例」(『国語国文』第二十一卷第九号、昭和二十七年・一九五二)の中で、「淵源が平安朝初期の南都古宗にある」と説いているが、その元は、同博士の「仮名発達史序説」

(昭和八年・一九三三刊)、『片仮名の研究』(昭和九年・一九三四刊)の二著書に見られる。

(5) 築島裕『訓点語彙集成』第一巻所収「ヲコト点概要」八頁。「第四図」(第十一図)を「第一図」(第八図)に変えて掲げる。「第四図」(第四群点)の左下隅の「テ」は築島博士の図のまま。

(6) 注(2) 著書第二編第三章「ヲコト点の分類および各種ヲコト点の点本」。

- (7) 注(2) 著書第三編第一章「ヲコト点の系統について」。
- (8) 注(5) 文献八六頁。
- (9) 注(2) 著書第三編第一章四九七頁。「平安初期のものには、筆者の分類の点とは異りの大きなものが現れてくる。しかしそれらといへども、多くは筆者の分類した群類のいづれかの祖点と見なされるべきものであると思ふ」と説かれてゐる。
- (10) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』三一九頁。この類を甲類でなく「乙類」とされたのは、特殊点の中でも比較的後期のもものと見たことによるとされる。
- (11) 注(10) 文献三三〇頁。築島裕「東大國語研究室所蔵訓点資料書目(その二)」(『國語研究室』第三号)。
- (12) 拙稿「일문어 訓点表記의 기원과 전개 과정」白点・朱点의 시원을 중심으로(『한글문화』42, 二〇〇八年七月)。
- (13) 春日政治『片仮名の研究』(注(4))。尚、築島裕「聖語藏大方広華嚴経古点の調査研究について」(『南都仏教』第八十六号、平成十七年十二月) 参照。春日博士が調査済とされた卷第十七の一卷は新訳の八十卷本である。
- (14) 注(12) 文献に、具体例を挙げてある。尚、春日博士も「形容詞の語尾くらしく、用例が少ないので多少疑はあるが」と述べている。
- (15) 平安初期の訓点資料の中に複点を一部に用いたものがあるが、それは新羅点吐の影響と考えられるものである。
- (16) 李承宰「京都国立博物館蔵の『華嚴経』卷第十七の訓点」(『訓点語と訓点資料』第一一七輯、二〇〇六年九月)。
- (17) 原本調査によると、羅摩伽経卷第三のヲコト点には、下

辺中に「シ」の点がある。華嚴文義要決のヲコト点の帰納は、拙著『角筆文献研究導論 上巻 東アジア篇』一八九頁参照。

(18) ジョン・ホイットマン「口訣資料と訓点資料の接点」佐藤本「華嚴文義要決」のヲコト点／点吐を中心に(第一一〇回訓点語学会研究発表、平成二十一年五月二十四日)。

(19) 佐藤達次郎氏旧蔵華嚴文義要決(以下、佐藤本華嚴文義要決)のヲコト点が、新羅人の手によって施されたのか、古代韓國語の加点を日本人が借用して日本語の訓読を示したのかは、論の分れる所であるが、ヲコト点と同時に施された合符と返読符・語順符は新羅の加点様式を示しているから、ヲコト点も新羅の点吐に基づいていることは動かない。

ジョン・ホイットマン教授は、佐藤本華嚴文義要決のヲコト点には、韓國の口訣資料に見られない用法のあることから、「点吐を理解した上で点吐体系を借りて日本語に用いた」(発表資料)とする「点吐の借用」説を述べている。私も、次の理由から借用説に賛成する。第一は、佐藤本華嚴文義要決の七箇のヲコト点のうち、「テ」「ヲ」「ト」「二」「ノ」「ハ」の六箇が単点で示されるのに対して、「ナリ」が線で示されているのは、「テ」「ハ」が二音節であるのに対して、「ナリ」は二音節であるためであると考えられること。第二に、佐藤本華嚴文義要決のヲコト点は黄褐色で書かれている。現存資料によると、韓国では高麗版以前は加点には角筆を用いているのに対して、日本では九世紀初には白点や黄褐色の加点が始まっていたことである。従って、ヲコト点の「ヲ」の使い方も、当時の日本語の助

詞「ヲ」の用法にひきつけて用いたものであろう。

- (20) 注(10) 文献三六九頁。「一辺の上に星点が「テ」「ニ」「ハ」と並ぶ形式は(略) 特殊点乙類から何らかの影響を受けて、第三群点の基本様式が成立したものと推測する」と述べている。

- (21) 注(2) 文献三三四頁。

- (22) 注(2) 文献五〇一頁。

- (23) 注(2) 文献二五九頁。

- (24) 注(2) 文献五〇二頁。

〔付記〕本稿は、本年二月十八日、韓国天安市の韓国技術教育大学校における口訣学会で発表した原稿に加筆したものである。中田祝夫先生の御高批を仰ぎたく願っていたが、それが叶わなくなってしまい悔まれる。先生の御冥福をお祈りします。

(広島大学名誉教授・国語学)